整理番号

D－2－1　　432

標 題 名

京都府立農事試験場臨時報告第十号

石油乳剤二就テ

著 者 名

発行者名

京都府立農事試験場

発 行 年

明治４１

製作年月

平成２８年９月

明治四十一年七月

京都府立農事試驗場臨時報告　第十號

石油乳劑ニ就テ

京都府立農事試驗場

寄贈図書
平野伊一氏
植物防疫資料館図書之印
50年9月2日
植物防疫資料館

緒言

本號ハ農作物ノ病虫害ニ對シテ之レカ驅除ヲナス方法中最モ行ヒ易キ石油乳劑ノ使用法ヲ登載ス

明治四十一年七月

京都府立農事試驗場

京都府立農事試驗場臨時報告第十號

目次

	頁數
石油乳劑	一
石油乳劑ノ製法	三
石鹸ノ良否	四
石鹸ノ分量	六
石油ヲ温ムル注意	七
攪拌	八
石油乳劑ノ分離セルヤ否ヤヲ見分クル法	八
除虫菊加用石油乳劑	九
乳劑ノ使用法	一一
時期	一四
作物ノ種類	一四
害虫ノ種類	一五

喞筒ノ必要

京都府立農事試驗場臨時報告第十號

石油乳劑

農作物ノ害虫ヲ驅除スル方法ハ隨分澤山アルガ、其ノ中デ最モ簡便デ奏効ノ著シイノハ藥劑的驅除法デアル、コノ藥劑的驅除法ニモ種類ハ極メテ多ク、殊ニ近頃化學ノ進歩ト共ニ、諸種ノ藥劑ガ發明セラルヽ樣ニナツテ益複雜ニナツテ來タ、然シ其ノ製法及ビ使用法ニシテ宜シキヲ得タナラバ、石油乳劑ノ如ク經濟的デ、シカモ多クノ害虫ニ對シテ比較的有効ナルモノハ少イデアロウ。

石油乳劑ハ石油ト石鹸トノ合劑デアル元來石油ハ卵子ヲ斃殺シ得ル處ノ唯一ノ藥劑デアツテ其殺虫ノ効ニ至ツテハコレニ及ブ

モノハ甚ダ少イ然シナガラコレヲ重用スル時ニハ作物ヲ害スル場合ガ多ク隨分危險デアルカラ適當ナル方法ニヨッテコノ危險ヲ除ク必要ガアルコレガ抑々石油乳劑ノ發明セラレシ所以デアッテ、石鹸ハ石油ヲ稀薄ニシテ其ノ危險ヲ除ク處ノ効ガアルノデアル尙コノ他コレヲ混ズルガタメニ石鹸固有ノ粘着性ニヨッテ石油乳劑ノ附着ヲ確ナラシムル間接ノ効ガアリ又直接ニハ虫體ノ皮膚ヲ溶解スル特効及氣孔ヲ閉塞シテ窒息セシムル處ノ殺虫ノ効モアルノデアルソレデアルカラ石鹸ノミヲ用フルモ尙ホ其ノ効ハ多イモノデ殊ニ加里石鹸(一名軟石鹸)ノ如キハ時ニ或ハ石油ニ匹敵スベキモノガアルノデアル

以上述ベタ如ク石油石鹸共ニ其ノ殺虫力ハ偉大ナモノデアルケレドモ合劑トナス場合ニハ其ノ製法ガ不完全デアルトカ又ハ使用ヲ誤ルトカスルト作物ヲ損傷スルコトガ少クナイノミナラズ

害虫ニ對シテ何程ノ効果モナイノデアルソレデコレヲ製スル場合ニハ粗畧ニ流レヌ様注意スルコトガ肝要デ又使用スルニ當ツテハ其ノ法ヲ誤ラン様ニ心掛ケネバナラヌ。

石油乳劑ノ製法

石　鹼　十二匁乃至十五匁

洗濯石鹼又ハ工業用石鹼ニテモヨシ加里石鹼(工業用)ヲ用フル時ハ他ノ石鹼ヨリ効多シ

石　油　一升

輕油ヲ用フルモ可ナリ

湯　五合

石油乳劑ノ製法ハ右ノ割合デ先ヅ石鹼ヲ細カク碎イテ熱湯ニ溶シテ石鹼水ヲ拵ヘ同時ニ又別ニ石油ヲ火ノ移リ易カラザル容器

ニ入レテ炭火デ暖メ石鹸水ト同ジ位ノ温度トナツタ時(攝氏六十度内外)コノ二液ヲ混ジテ噴筒デ劇シク出入混合スルノデアルガ此ノ場合噴筒ノ筒口ヲ液面カラ少シ離シテ空氣ヲ混ズル樣ニスルガヨイ、ソースルト乳白色ヲ呈スル處ノ糊狀ノ石油乳劑ガ出來ルコノモノハ原液デアルカラコレヲ水ニ稀釋シテ用ユルノデアル、然シ攪拌ノ度ガ足ラヌト石油ト石鹸水トハ分離シテ作物ニ害ヲ與ヘルカラ斯樣ナモノハ再ビ火ニ暖メテ攪ゼ直シテ行ツノデアル完全ニ調製シタ石油乳劑デアツタナラ夏ハ二週間冬ハ之ヨリ稍々永ク貯藏スルコトガ出來ル。

石油乳劑製造上注意スベキ事項ヲ擧ゲルト次ノ通デアル。

石鹸ノ良否　石鹸ハ油脂トアルカリトノ化合物デアル石油乳劑ヲ製造スルニハ高價ノモノデナクトモ油脂トアルカリトガ充分ヨク化合シテ居ルモノデアツタナラ澤山デアルガ粗製石鹸

ノ中ニハ往々分離シテ居ルモノ又ハ米利堅粉ヲ多量ニ混ジテ居ルモノ或ハ又食鹽ヲ含ンデ居ルモノナゾガアル斯様ナルモノヲ用フル時ハ到底良好ナ石油乳劑ヲ製スル事ハ出來ナイカラ用ヒヌガヨイ遊離脂肪ノアルモノハ一寸ト分リ悪イケレド使用シタ後幾分カ手ニ油切ルノハ大低之ヲ含ンテ居ル又石鹸ヲ切リタル面ニ舌ヲ當テヽ「ヒリヽツト」刺ス様ナ感ノアルノハ遊離アルカリノ混ジテ居ル證テアル又アルコールデ溶カシタ濾液ニ「フエノールフタレーン」ト云フ藥ヲ入レテ赤色ヲ呈スレバ遊離アルカリノアル證テアルカラ用ヒヌガヨイ米利堅粉ハ不正ノ練製化粧用石鹸ニ限ツテ用ヒラレルノデアルガ甚ダシキモノニ至ツテハ五割以上八割モ混ジテアルノガアルソーデアル一體ニ見カケノ積ヨリモ目方ノ重イ石鹸ハ米利堅粉又ハ白土ノ混ジテ居ル恐レガアル此様ナモノハ石油乳劑ノ原料ト

シテ用ユル不可ナルノミナラズ洗滌用トシテモ殆ド効果ガナイノデアル、又石鹸カラ水滴ノ出ヅルモノ又ハ切リ口ノ濕リ强イモノハ全ク鹽ノ氣ガ拔ケテ居ランモノデアル(沸煑法ニヨッテ造ル石鹸ニハ是非食鹽ヲ使ハネバナラヌケレドモ製造後曹達液デ煑テ鹽氣ヲ去ルモノデアル)食鹽ハ石油乳劑製造上尤モ忌ム可キモノデアルカラ之レヲ含ムモノハ決シテ使用シテハナラヌ又農事試驗場本場ノ成蹟デハアイボン石鹸(價一個(七十匁)貳拾錢内外)ガ最モヨイト云フコトデ分量モ八匁位ヲ用フルトイフコトデアル

石鹸ノ分量　石鹸ノ分量ハ害虫作物ノ種類及ビ使用ノ時季等ニヨッテ多少斟酌スベキデアル卽チ特ニ石鹸ノ効ヲ必要トスル虫類ニハ稍々多クヲ用ヒ然ラザルモノニハ十二匁位ニテモ宜ロシイ軟弱ナル作物ニ灌注スル場合ニハ石鹸ノ分量ヲ多クシ

テ石油ノ危險ヲ少クスル必要ガアル又夏季使用スル時ハ石鹸ノ分量ハ多クテモ差支ナイガ冬季ニ於テヤヽ濃厚ナモノヲ使用スル場合ニハ石鹸ノ分量ガ多イト寒氣ノ爲メニ乳劑ハ凝固シテ噴霧器ノ細孔ヲ閉塞スル恐ガアルカラ夏季ヨリ石鹸ヲ少クスルガヨイ又加里石鹸ハ水分ノ含ムコトガ多イカラ他ノ石鹸ヨリハ少シク多ク用ユル必要ガアル。

石油ヲ暖ムル注意　石油ヲ暖ムルニハ細心ノ注意ガ肝要デ少シノ不注意ノ爲メニ大失敗ヲ招ク樣ナコトガ往々アルノデアル石油容器ハ火ノ移リ易カラザルモノデアツタナラ何ヲ用ヒテモヨイガ極ク多量ノ原液ヲ製スルノデナケレバ石油ノ空鑵ヲ用ヒ炭火デ暖メルノガ最モ便利デアル火焰ヲ高ク擧グル粗朶ノ類ハ決シテ用ヒテハナラヌ又石油空鑵モ甚ダシク錆ノ來テ居ル樣ナモノハ大ノ禁物デアル。

石油及ビ石鹸水ノ温度ハナル可ク同シ位ノ温度トナスガヨイ其程度ハ指ヲ差入レテ熱味ヲ感ズル位(攝氏六十度内外)ガ適當デアル。

攪拌　石油ト石鹸水トヲ混ズルニ當リ充分ヨク攪拌セヌト分離シ易キモノデアルカラ七八分間充分ニ攪拌スルコトガ尤モ大切デ分離スルト否トハ攪拌ノ精粗ニヨツテ分ルト言フテモ差支ナイ常ニ攪拌シテ最モ好成蹟ヲ得ルノハ喞筒ヲ使用スルコトデアル木片竹篦等ヲ用フル事モアルガ其ノ結果ガアマリ面白クナイ夫レデ若シ喞筒ノ適當ナモノガナカツタナラバ竹筒ヲ造テ攪拌ニ用ユルガヨイ。

石油乳劑ノ分離セルヤ否ヤヲ見分クル法　合劑ノ分離セルヤ否ヤヲ驗スルニハ原液ノ一二滴ヲ水ニ滴下セバ分離セルモノハ水面ニ石油ガ浮ブカラ直グ分ルガ此ノ法ハ少シ熟練シナイト

一寸見分ケニ困難デアル最モヨク判然スル事ノ出來ルノハ原液ヲ壜ノ如キモノニ入レテ翌日迄デ放置スルト分離シタルモノハ其ノ底部ニ石鹸水ガ溜リ上方ニ石油ガ遊離シテ居ルカラ直ク判別ガ出來ル。

斯クノ如ク分離シタモノハ日一日ト益々分離スルノデアルカラ冬季果樹類ニ撒布スルト少シ位ノ分離ハ大シタ害モナイガ軟弱ナル作物ニ撒布スルト往々枯死スルコトガアル故ニ如斯モノハ再ビ火上ニ暖メテ攪ゼ直シテ行フ必要ガアル。

除虫菊加用石油乳劑

石油乳劑ノ効ヲ一層多カラシムル爲メ除虫菊加用石油乳劑ナル者ヲ製スルコトガアル。之レガ製法ハ石油乳劑ト別ニ變ツタコトハナイ唯ダ除虫菊ノ浸出液ヲ混ズルト云フニ過ギナイ卽チ石油

一升ノ幾分ヲ以テ除虫菊ノ花蕾六七合(除虫菊粉ナラバ二十匁位)ノ浸出液(密閉シテ浸漬時間ハ十五時間内外)ヲツクリ殘リノ石油ヲ混ジテ石油乳劑ヲ製スレバヨイノデアル。

除虫菊ハ人モ知ル如ク一種奇異ナル麻醉毒ヲ有スルモノデアツテ驅虫劑トシテ世人ニ大ニ珍重セラレテ居ル所ノモノデアルカラ之レノ粉末ハ普通坊間ニノみゞり粉ト稱シテ販賣シテ居ル藥舖ニ賣ツテ居ルモノハ隨分高價デ驅除劑ニハ不經濟デアルカラ當業者自カラ圃地ノ一部ニ栽培セバ態々高價ヲ拂フノ必要ハナイノデアル除虫菊ノ尤モ効果ノ多イ部分ハ花部デアル故ニ花ノ開キタルモノヨリ漸次摘採蔭干トナシ之レヲ適當ノ容器ニ貯ヘ置キ必要ニ應ジテ使用スルノデアル開キ過ギタル花ヲ採ルノハ其ノ効果ガ甚ダ少イ之レハ開花スルト其中ニ含有シテ居ル或部分ニ變化ヲ起スカラデアル除虫菊ノ有効成分ニ就テハ學者ノ說ガ一

定シテ居ナイ或ル學者ハ揮發性ノモノダト云ヒ或ル學者ハ不揮發性ノ者ダト云ツテ居ル吾々ノ實驗デハ密封シテ貯藏シテ置イタモノヽ方ガ効ガ多イ樣ニ思ハレル。

驅除用ニハ普通花部ヲ用フルケレドモ蔭干ニシタ莖ヲ使ツテモ其ノ目的ヲ達スルコトガ出來ル唯ダ花部ヲ用ユル場合ヨリハ分量ヲ多ク用ユル必要ガアルノミデアル又茲ニ注意ス可キハ赤色ノ除虫菊ハ殆ンド殺虫ノ効ガナイト云フコトデアル

乳劑ノ使用法

石油乳劑ハ前ニモ一寸述ベタ如ク多クノ害虫ニ對シテ斃殺ノ効ガアルノデ殊ニ卵子ヲモ殺シ得ル處ノ唯一ノ藥劑デアル又除虫菊加用石油乳劑ニ至ツテハ甲翅ヲ有スル害虫ヲモ殺スコトガ出來ル處ノ良劑デアルカラ之レヲ適當ニ使用シタナラ其ノ効果ハ

甚ダ少クナイ普通石油乳劑ヲ以テ害虫ヲ驅除スルノハ原液ヲ水ニ稀釋ニシテ噴筒ヲ以テ一面霧ノ樣ニ灌注スルノデアル。

今左ニ石油乳劑ヲ以テ驅除スル處ノ重ナル害虫ト其ノ稀釋スル度合ヲ示セバ

卵子	二倍乃至三十倍液
螟蛉類	二十五倍乃至三十倍液（除虫菊加用石油乳劑ヲ用フル方ヨシ）
葉捲虫及芽虫	二十五倍乃至三十五倍液（葉捲虫ハ葉ヲ捲カサル内ニ灌注スベシ）
天牛ノ類	十倍内外（注射器ヲ以テ虫孔ヨリ注入スベシ）
蚜虫類	十倍乃至四十倍液
介殻虫類	三倍乃至三十倍液

浮塵子類　十五倍乃至三十倍液
蛞蝓　二十倍乃至三十倍液
かぶらばちの幼虫　三十倍乃至四十倍液
食葉甲虫類　十五倍乃至四十倍液
椿象類　二十倍乃至四十倍液

除虫菊加用石油乳劑ヲ用フルニハ左ノ割ニ稀釋シテ用フルガヨイ

蚜虫類　七十倍乃至八十倍
綿虫類　四十倍乃至五十倍
食葉甲虫類ノ幼虫　二十倍乃至四十倍
椿象類　二十倍乃至四十倍

右ニ擧ゲタハ普通ニ驅除スル處ノ重ナル害虫デ尚ホ此ノ外斃殺シ得ベキ處ノ害虫ハマダマダ澤山デアルケレドモ其ノ使用法ガ下手デアルト何程ノ効果モナイバカリデナク却テ作物ヲ害スル

様ナコトガアルソレデ撒布スルニ當ッテハ必ズ使用ノ時期作物ト害虫ノ種類等ニ付テ注意ヲ施シ且ツ稀釋ノ度ヲ定メ又使用ノ法ヲ異ニシテ經濟的ニ而カモ最モ有効ニ使用セネバナラヌ左ニ少シク之レニ就テ述ベヨウ。

時期　石油乳劑ハ使用ノ時期ニヨッテ大ニ稀釋ノ度ヲ斟酌セネバナラヌ卽チ冬季果樹ナドニ使用スル場合ニハ濃厚ナモノヲ使用シテモ休眠期デアルカラ一向差支ナイガ夏季ナドデ生育ノ盛ナ時ニハ組織カ軟弱デアルカラアマリ濃厚ナモノヲ用フルト損傷スル患ガアル故ニ薄クシタモノヲ何回モ注グノデアル又軟弱ナル作物ニハ日中ヲ避ケ日沒後又ハ曇天ニ於テスルガヨイ、ソーカト云ッテ雨降ノ前ナドハアマリ好マシクナイ。

作物ノ種類　害虫ガ同一デモ作物ノ强弱ニヨッテ稀釋ノ度ヲ異ニセネバナラヌ例令ハ甘藍ト白菜トニ蚜虫ガ發生シタ時ニ甘

藍ニハ二十倍ノモノヲ使ッテモ些ノ損傷ヲモ認メナイケレドモ白菜ハ三十倍デモ往々葉ガ枯レル樣ナコトガアルノデアル又樹幹ナドニ介殻虫ガ多數發生シタ時ハ噴筒デ撒布スルヨリハ刷子或ハ布片ノ樣ナモノヲ乳劑ニ浸シテ塗抹又ハ磨擦スルガ有効デアル。

害虫ノ種類　害虫ニヨッテ稀釋ノ度ヲ異ニセネバナラヌコトハ無論デアルガ同一ノ害虫ニテモ時期ニヨッテ非常ニ藥劑ニ對スル抵抗力ニ強弱ガアル石油乳劑デ容易ニ殺シ得ルノハ多クハ其ノ幼虫期デシカモ孵化ノ當時ガ尤モ驅除ニ容易デアル蛞蝓ナゾハ其ノ適例デアル介殻虫ノ如キハ卵ヨリ孵化シテ樹幹ヲ遊フテ居ル際ニハ三四十倍位ノ稀釋液デモ殺スコトガ出來ルガ最早固着シテ介殻ヲ分泌シタ後ハ容易ニ殺スコトガ出來ルモノデナイソレデ如斯モノハ冬季ニ至ッテ三四倍位ノモノ

ヲ灌注又ハ塗抹スルノデアル又冬季ハ總テ抵抗力ガ強イカラ濃厚ナルモノヲ用ユルガ効果ガ多イ浮塵子ナゾハ朝不活潑ナ時ヲ選ンデ撒布セヌバナラヌ。

斯様ニ稀釋ノ程度及使用ノ時期方法ヲ異ニセヌバナラヌカラ各害虫ノ下ニ何倍乃至何十倍トシタノデ若シ作物ニシテ堪ヘ得ル事ヲ認メタナラバ之レ以上濃厚ナモノヲ使用スルガ有効デアル右ニ擧ゲタ如ク各種ノ點ニ注意シテ二三日又ハ五六日目毎ニ(害虫ノ發生多カラザル時ハ一二週間目ニテヨシ)二三回乃至六七回撒布シタナラバ最モ有効ニ最モ經濟的ニ使用スルコトガ出來ルノデアル。

注意　蔬菜類ニ石油乳劑ヲ撒布シタナラバ一二回雨ニ遇フカ晴天ナラバ一週間位ヲ經テカラデナケレバ食用ニ供シ難ヒカラ其ノ考デ撒布セヌバナラヌ。

噴筒ノ必要

石油乳劑ヲ使用スルノハ天牛ノ幼虫ニ注射器ヲ以テ灌注スルトカ冬期樹幹ニ刷子ナゾデ塗抹スルトカノ如キ特別ノ場合ヲ除クノ外ハ噴筒ヲ以テ一面ニ霧ノ様ニ撒布スルノデアルカラ農家ハ是非噴筒ノ用意ガ必要デアル此頃各地デ販賣シテ居ル噴筒ハ隨分澤山アルガ各々優ツテ居ル處モアレバ劣ツテ居ル處モアル又用途ニ依ツテ適否ガアルカラ玆ニ何ヅレガヨイトモ斷言スルコトハ出來ナイガ農場用トシテ當場ノ希望スルノ筒處噴ハ構造ガ堅牢デ且ツ簡單デアツテ修繕シ易ク面積廣キ圃場ニ於テモ疲勞少ク各作物ニ使用シ得ル處ノ廉價ナル品デアル從來當場ガ使ツテ見テ稍々希望ニ近イノハ三本管注射器デアル(價拾五圓內外)然シ不廉デモカマワナイト云フコトナレバ背負噴筒(價貳拾圓乃至

參拾五圓位)ハ撒布ニ尤モ便利デアル何レニシテモ害虫ノ驅除病害ノ豫防ナゾハ大概噴霧器ニ依ラヂバナラヌノデアル又蠶病消毒ナゾニモ必要デアルカラ是非二三共同デナリトモ備ヘ付ケテ置ク必要ガアル然ラザレバ折角有効ナ殺虫劑モ使用スルニ道ガナイノデアル。

注意　噴筒デ石油乳劑ヲ使ツタナラバ使用後清水デヨク洗ツテ置ク事ガ肝要デアル若シソーデナイト乳劑ノタメニ護謨管ガ溶解シテ間モナク使用ニ堪ヘナイ樣ニナルモノデアル。

以上述ベタ處ニヨツテ石油乳劑ノ製法及ビ使用法ハ概略ワカルデアロート思フガ元來害虫驅除ト云フ事ハ隨分誤解サレテ居ル樣デアル元ト害虫ト云フ者ハ氣候ニヨツテ多少コツアルガ年々發生スルト云フコトハ分リ切ツテ居ルノデアル夫レデ吾々ガ作物ヲ栽培スルニ當ツテハ氣候ヲ適確ニ豫測スルコトガ出來ナイ

限リ豫メ發生スル者ト云フ感念ヲ以テ初メカラ注意ヲ拂ッテ其ノ發生ヲ出來得ル丈ケ抑制スルトカソノ害虫ヲ避ケル樣用意スルトカシナケレバナラヌノデアル卽チ輪作ヲ行フテ年々同一ノ地ニ害虫ノ好ム作物ヲ作ラヌ樣ニスルトカ早播又ハ晩播ヲシテ害虫發生ノ時期ヲヤリ過シ又ハ出シ抜ロテ其ノ害ヲ免ルヽトカ或ハ圃場ノ整理ヲ行フテ害虫ノ潜伏處產卵處等ヲ除クトカ(塵埃落葉雜草等ヲ燒棄スルガ如シ)肥料ヲ加減シテ害虫ガ好マヌ樣又ハ害ニ堪ヘ得ル樣ニ質ヲ强剛ニ仕立ツルトカ或ハ又ハ害虫ノ害敵タル寄性菌類寄性虫類及食虫動物ノ保護利用ヲ計ルト云フ樣ナグワイニ農業的自然的ノ驅除ニョッテ其ノ發生ヲ抑制シ豫防スルト云フコトガ大切デアル。

斯樣ニシテ尙ホ害虫ノ發生スル徵ガアレバ藥劑デ豫防モスル愈々發生シタナラバ機ニ遲レヌ內ニ夫レ々々害虫ニ依ッテ適當ニ

處置(藥劑又ハ人工的驅除)スルト云フ風ニシタナラバ豫防驅除ノ目的ヲ達スルコトガ出來テ害虫ノ發生モ少ク被害モ免ルヽ事ガ出來ルノデアル然ルニ多クノ人ハ豫メ備ヘルト云フ事ヲセズシテ害虫ガ發生シテ害ヲ逞スルニ至ツテ初メテ周章狼狽一意藥劑ニヨツテ而カモ一時ニ殺滅シヨウトスルノデアルソシテ藥劑ノ効果ガ思フ樣デナイト丸デ無効ノ樣ニ言フノデアル之レハ隨分無理ナ談デ最早全圖ニ盛ニ發生シタ後ハ容易ニ驅除ガ出來ナイノデ瓦斯類デ薰殺スルナラ兎モ角現今デハ如何ニ藥劑デ在テモ勢猖獗ヲ極メテ居ル害虫ヲ一時ニ全滅シ得ル樣ナ良劑ハナイノデアルカラ斯樣ナ方法ニヨツテ藥劑ノ効果ヲ彼レ此レ言フ事ハ出來ナイ殊ニ害虫ノ形態習性ナゾモ一向調ベズニ無鐵砲ニ使用シタ結果有害無効ニ終ツテモ夫レハ藥劑ノ罪デナク其人ノ罪デアル然ルニ近頃コヲ云フ傾向ノアルノハ藥劑ノ爲メ大ニ悲ム可

キコトデ寃罪モ又甚ダシト言ヘヂバナラヌ

明治四十一年七月二十八日印刷
明治四十一年七月三十日發行

京都府立農事試驗場

（葛野郡桂村）

京都市上京區下立賣通小川東入
西大路町十番戸
印刷者　中西勝太郎

京都市上京區下立賣通小川東入
西大路町十番戸
印刷所　中西印刷合名會社

D
2-1
432